図書館情報メディア研究 23 巻 1 号 1〜19 ページ

2026 年

公共図書館におけるひきこもり支援
ー奈良市立中央図書館による若者の自立支援に着目してー

村田直史*，吉田右子**

Public Library Support for Hikikomori: A Case Study of Youth Self-Reliance Support at the Nara City Central Library

MURATA Naofumi, YOSHIDA Yuko

抄録

日本では、内閣府の 2023 年調査により、ひきこもり状態にある人が推計約 146 万人に上るとされ、医療・福祉分野に限らない支援体制の構築が課題となっている。本研究は、奈良市立中央図書館で実施された若者の自立支援事業を対象として調査し、公共図書館がひきこもり支援にどのように関わり得るのかを検討した。文献資料の整理と関係者への聞き取り調査の結果、同館では、なら若者サポートステーションと協働し、絵本の読み聞かせを用いたコミュニケーション支援、図書館業務を活用した職場体験、家族向け相談会等が行われていたことが明らかとなった。これらの実践では、絵本、司書の知識と経験、公共図書館という場が組み合わされ、参加者が他者や社会と接点を持ちながら、自立に向かう機会が形成されていた。以上から、公共図書館は専門機関の代替ではなく、地域の支援機関と連携しながら、資料・司書・場という公共図書館のリソースを生かし、社会参加に向かうひきこもり当事者の自律形成を支え得ることを示した。

Abstract

In Japan, a 2023 survey by the Cabinet Office estimates that about 1.46 million people are in a state of hikikomori. Because of this, it is important to build support systems that are not limited to medical and welfare services. This study examines a youth independence support program carried out at Nara City Central Library and considers how public libraries can be involved in hikikomori support. Based on an analysis of documents and interviews with people involved in the program, the study found that the library worked with the Nara Youth Support Station to provide several forms of support. These included communication support through reading picture books aloud, workplace experience using library tasks, and consultation meetings for family members. In these practices, picture books, the knowledge and experience of librarians, and the public library as a place were combined. They created opportunities for participants to connect with other people and with society while moving toward independence. The study shows that public libraries should not be seen as replacements for specialized support organizations. Rather, by working with local support agencies and making use of their resources, including materials, librarians, and spaces, public libraries can help people in a state of hikikomori develop autonomy and take steps toward social participation.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral program
Graduate School of Library, Information and Media Studies
University of Tsukuba
** 筑波大学図書館情報メディア系
Institute of Library, Information and Media Science
University of Tsukuba

1 はじめに

1.1 日本におけるひきこもり支援政策

日本のひきこもり[1]状態にある人の数は、内閣府の 2023 年調査では推計で約 146 万人とされており[2]、厚生労働省を中心として保健福祉の分野で支援が進められてきた。2000 年代から本格的な支援政策が始められ「地域若者サポートステーション」[3]といった支援施設が整備されていくとともに、2010 年には『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン』(以下、旧ガイドライン)が出された。旧ガイドラインでは、ひきこもりの原因を病理的問題と捉え、個人の変化を通じて問題の解決を図る「医療モデル」の立場を取り「自立」を支援の目的としていた[4]。

しかし、2025 年に出された『ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤～』(以下、新ガイドライン)では、ひきこもり当事者に対する環境・社会との調整を図ることによって問題を改善する考え方である「社会モデル」が示され「医療モデル」と併せて重要視されるようになり、支援の目的も「自律」としている。「社会モデル」の採用に伴い、分野横断的な支援への取り組みが重要となってきている[5]。

さらにひきこもり支援に関わる法律として、2024 年施行の「孤独・孤立対策推進法」がある[6]。同法に基づく「孤独・孤立対策に関する施策の推進を図るための重点計画」では、ひきこもり状態にある人を対象者に含め、公共図書館による「つながりの場」の整備や関係機関との連携強化が位置づけられている[7]。

1.2 公共図書館におけるひきこもり支援

公共図書館は「つながりの場」としての役割を求められる一方で、2012 年に発出された「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」には、サービスの対象として「若者の自立支援」が記されている。同基準には、若者の自立支援に関わる資料や情報の整備・提供、そして特に配慮を必要とする者への施設整備、児童・青少年のための専用スペースの確保が記載されている[8]。同基準に先立つ第 6 期中央教育審議会生涯学習分科会では「若年無業者や引きこもり等の若者が社会生活を円滑に営む上で必要な社会的・職業的自立のための学習」が議論されている[9]。このことからも、基準の「若者支援」には「ひきこもり支援」が射程に含まれていると推察される。

以上、公共図書館には、ひきこもりや若者の自立に関する支援が求められていることから、公共図書館では多様な形で支援が行われている。支援の方法は、①特集展示[10]やパスファインダー作成による資料提供[11]、②公共図書館を会場とした研修会[12]・相談会[13]の実施、③図書館を活用した職場体験等の体験活動[14]、④公共図書館における居場所の提供[15]といったものがある。

しかし、公共図書館においてひきこもりや若者への自立支援が行われている実態は見られるものの、日本の公共図書館とひきこもりや若者への自立支援をテーマとした学術論文は存在せず[16]、研究の蓄積がない状態である。社会問題として解決が求められ「基準」にも「若者の自立支援」が求められているひきこもり支援に対して、公共図書館が果たし得る役割を明確にし、学術研究として蓄積していく必要がある。

2 目的・手法

2.1 本研究の目的と意義

本研究の目的は、奈良市立中央図書館 (以下、中央図書館) における若者の自立支援事業の実態分析を通じて、ひきこもり支援における公共図書館の役割と貢献可能性を明らかにすることである。また、本研究の意義は、第一に、これまで十分に検討されてこなかった公共図書館における若者の自立支援の実践について、その具体的内容を明らかにする点にある。第二に、若者の自立支援とひきこもり支援の関係を整理し、公共図書館がひきこもり支援のどの段階に関与し得るのかを検討する点にある。第三に、公共図書館を資料・職員・空間を備えた地域の支援資源として位置づけることで、日本のひきこもり支援政策に対して、専門機関だけでは担いきれない社会参加への接点を形成するための基礎的知見を提示する点にある。

2.2 本研究におけるひきこもり支援と若者の自立支援の位置づけ

旧ガイドラインには、ひきこもり当事者が支援の目的である「自立」に至る段階を「ひきこもり段階」「社会との再会段階」「社会復帰」として整理している。「社会との再会段階」では「社会と徐々に関わっていく期間」として「中間的・過渡的な時間と場」を設け、この「時間と場」の中で「同じような状態の人と集団行為を行う」ことで「段階的な社会参加」を進めていくと説明されている。こ

の整理を表したものが図 1 である[17]。

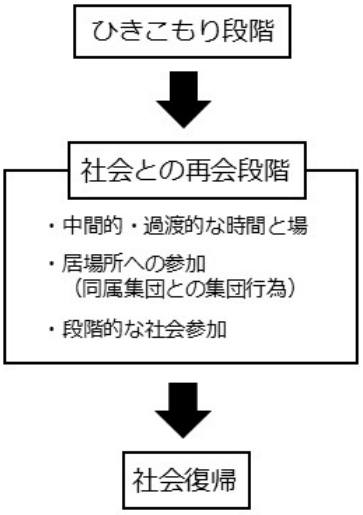

図 1　ひきこもり支援の諸段階

出典：「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」, 2010,

「図1　ひきこもりの諸段階」（p. 22）および
「図3　ひきこもり支援の諸段階」（p. 42）を元に筆者作成

他方で、新ガイドラインでは支援の目的が「自律」と再定義されたが、支援過程については、図 1 のように整理されていない。そこで図 1 に「自律」に至る「自律の段階」過程を加味して整理したものが図 2 である。

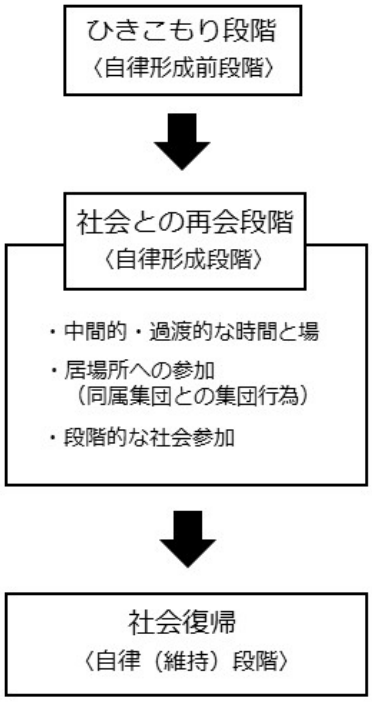

図 2　ひきこもりの段階構造と自律・社会参加過程

＊筆者作成

図 1 は「当事者と社会との関わり」で段階を捉えていたが、図 2 では「当事者の自律の段階」の観点から整理した。具体的には、図 1 における「ひきこもり段階」「社会との再会段階」「社会復帰」に対して「自律形成前段階」「自律形成段階」「自律（維持）段階」を対応させた。「自律の段階」という枠組みの中では、「社会復帰」は「自律」が表出した 1 つの形として取り扱う。ひきこもり支援の段階的な全体像を図 2 とした場合、国が「つながりの場」として公共図書館に求める「居場所支援」は、「自律形成前段階」における支援として位置づけられる。

本研究では「社会との再会段階（自律形成段階）」における若者の自立支援に着目する。本事例は、中央図書館となら若者サポートステーション[18]（以下、サポートステーション）が協働して実践したものである。サポートステーションの目的は「就労支援」であり、対象はハローワークで支援を受ける前段階の若者である。この意味でサポートステーションの対象者は「ひきこもり段階」の若者ではないが、ひきこもり支援の中段に位置する「社会との再会段階」における支援と重なる部分がある。

サポートステーション作成の事業案内には、対象者として「人とのつき合い方がわからない」「なかなか外に出られない」といった文言や、保護者を対象とした講習の実施目的に「わが子の引きこもる状態の理解」といった文言が見られる。さらに、個別事例においてもひきこもり状態であった者を複数名確認した。また、第 4 章で取り上げる中央図書館の元担当職員への聞き取りからは、参加者の多くがひきこもり状態にあり、支援プログラムの作成段階において、サポートステーションの担当者との間で、ひきこもり状態の若者に焦点を当てたプログラムを作成することが合意されていたことを確認した。これらを踏まえると、本事例は若者の自立支援事業であると同時に、実態としてはひきこもり支援の側面を有していた。

以上から、本事例で実践された「若者の自立支援」を「ひきこもり支援」の段階における 1 局面として位置づける。その上で「若者の自立支援」を調査し実態を明らかにした上で、得られた結果をひきこもり支援の文脈に置き換え「社会との再会段階（自律形成段階）」における公共図書館によるひきこもり支援として考察を深める。

2.3　研究課題

本研究の目的は、中央図書館における若者の自立支援の実態分析を通じて、ひきこもり支援における公共図書館の役割と貢献可能性を明らかにすることである。中央図書館では、2013 年から 2015 年にかけて、サポートステ

ーションと協働し、若者の自立支援を行っていた。同館が実践した若者の自立支援の実態を明らかにするため、本研究では 2 つの研究課題を設定する。

第 1 に、若者の自立支援事業の成果を明らかにする。事業の具体的な成果を明らかにすることで、公共図書館で行う若者の自立支援の意義が明らかとなる。

第 2 に、若者の自立支援における図書館のリソースを明らかにする。公共図書館に特徴的なリソースは「資料」「司書」「場」であるが、これらが具体的にどのように活用されていたかを明らかにすることで、公共図書館が実践する支援事業の特徴が明らかとなる。

以上の研究課題の分析を踏まえて考察を行い、中央図書館による若者の自立支援の実態の分析を通じて、ひきこもり支援における公共図書館の役割と貢献可能性を明らかにする。

2.4 先行研究

日本の公共図書館とひきこもり支援や若者の自立支援に関する論文は存在しないが[19]、韓国の公共図書館とひきこもり支援に関する論文は存在している。チョン・グンハ及びノ・ヨンヒは、ひきこもり支援については、相談センター等の専門機関が中心となっているが、スティグマへの懸念から当事者や家族が支援にアクセスしにくい状況があると指摘する。一方で、公共図書館は匿名性と中立性を備えた生活圏内の公共空間として、支援への入口や中間的プラットフォームとして機能し得る可能性があることを示し、自治体の制度として図書館での支援を組み込むことで、公共図書館をひきこもり支援に活用することを述べている[20]。こうした「場としての図書館」に着目した研究は、河本毬馨が公共図書館における場の機能と役割を網羅的に把握し、抽象化することで概念モデルを提示している[21]。

本研究で取り上げるような図書館を使った体験活動に関する事例は、神奈川県平塚市中央図書館において、NPO 法人ぜんしんによるボランティア体験の事例報告がある。ぜんしんは図書館を活動の場とすることで、本の修繕や書架整理などのボランティア体験を通じ、ひきこもり当事者を自立支援へと結びつける取り組みを行っている[22]。

嶋田学は、鹿児島県指宿市立図書館の事例を紹介している。来館していたひきこもりと思われる若者に、はじめに絵本を楽しむことを提案し、読書の喜びを感じてもらう時間を作り（居場所の確立）、次の段階として図書館のおはなし会で語り手として参加することを提案し、子どもたちとの接点（出番）を作った。こうした経験を経て、若者は徐々に他者とのコミュニケーションが取れるようになり、図書館で見た様々な職業や資格の本に刺激を受けて職業訓練所に通うことになり、訓練で得た資格を元に職業に就くことができたという事例を紹介している[23]。

こうした図書館でのひきこもりに対する「居場所」や「体験活動」に関する取り組みは、事例報告が示されているものの、文献調査や聞き取り調査に基づく学術論文は発表されていない。

2.5 研究方法

研究方法として、中央図書館での支援事業に関して情報を整理し、同館の若者の自立支援の実態を明らかにする。同館で実施されていた支援は『図書館雑誌』といった図書館の実践を取り扱った雑誌や著作、ウェブサイトには公開されていない。そのため情報については、中央図書館と事業を実施した当時「地域若者サポートステーション」事業を受託していた奈良県中小企業団体連合会中央会[24]（以下、中央会）から資料の提供を受け、事業内容を確認した[25]。資料は大きく分けて、サポートステーションと中央図書館との間で使用された打合せ資料、平成 27 年度の地域若者サポートステーション事業に申請するための企画書、個別プログラムの予定表や実施後の記録、相談会実施後のアンケートや振り返り用紙といった参加者の感想が記入された資料、プログラムで用いられた講義資料、事業に関するチラシやパンフレットであった。ただし、これらの資料には、予定段階で作成されたと考えられるものや、実施日・参加者の年齢や性別等が最終的な事業報告書の記載と一致しないものも含まれていた。また、個別プログラムについても、事業報告書上では複数回実施されていることが確認できる一方で、各回の具体的な実施内容を記録した資料は一部に限られていた。そのため本研究では、厚生労働省に提出された事業報告書を基準としつつ、他の資料との照合を行い、整合性が確認できる情報を整理した。あわせて、断片的に残された個別プログラムの記録を全体の事業内容の中に位置づけることで、可能な限り実践の具体像を把握することとした。

本研究では「事業実績が把握できる資料」及び「各プログラム実施後の記録資料」、さらに参加者が記入した「振り返り用紙」や「アンケート」を整理し、支援事業の内容を第 3 章で記述した。その上で、資料の整理を通じて生じた疑問点について聞き取り調査を行い、第 4 章として記述した。加えて「振り返り用紙」等に記された参加者の感想や記述については、第 5 章の考察において分析資料として用いた。なお、本研究は筑波大学研究倫理審査委員

会の承認（承認番号第 25-102 号、承認年月日 2025 年 10 月 27 日）を得た上で実施した。

また、本研究の考察部分においては、2.2 で整理した図 2 を援用し、本事例で明らかにする「若者の自立支援」を「ひきこもり支援」の文脈で再定位する。

3 支援事業の内容

本章では、文献資料から得られた情報を基にして、中央図書館で実施されていた若者の自立支援を整理する。

3.1 支援の概要

初めに、支援が実施されていた 2013 年当時の中央図書館の状況について記載する[26]。中央図書館は、奈良公園の近辺に所在する「ならまちセンター」の地下 2 階、3 階及び 4 階に位置している。地下 2 階は移動図書館事務所、3 階は事務室及び児童室、4 階は一般室となっている。同センターは、旧奈良市庁舎の跡地利用として 1989 年に開館した。

2013 年当時の職員構成は、正規職員が 8 人(うち 3 人が再任用職員)であるが、司書職としての採用はなかった。図書館としての実務は、非正規職員である嘱託職員 12 人と臨時職員 5 人で運営されていた。蔵書数は約 32 万冊、年間貸出冊数は約 36 万 5 千冊、館の延床面積は 2,666 ㎡であった。奈良市の人口約 36 万人に対し、中央図書館の他、地域館である西部図書館と北部図書館、そして移動図書館車を巡回させることで図書館サービスを行っていた。

次に、サポートステーションの状況について記載する。厚生労働省から同事業を受託していた中央会は、近鉄奈良駅に近い奈良県中小企業会館の 2 階に所在し、中央図書館まで徒歩約 20 分の距離にあった。中央図書館が関わった事業が、サポートステーションの事業全体の中でどのように位置づけられていたのかを把握するため、2015 年度の事業受託に際して作成された資料を表 1 のように整理した。

サポートステーションは、就労を主な目的としているが、就労の専門機関であるハローワークの支援を受ける前段階の若者が対象である。そのため、①の事業で文書や履歴書の書き方、模擬面接など社会人としての基礎を学ぶ。②の事業で職場を見学し、就労に対するイメージを深める。次に、③の事業で就活を始めるための基本的なコミュニケーショントレーニングを行い、④の事業で職場体験を通じ、具体的に当事者と仕事を結び付けていく。さらに、⑤の事業では就労や自立に関する講習会の実施や、家族の心理負担を軽減し、当事者を支援につなぐ入り口の役割を担う相談会を企画している。

図書館を使ったプログラムは、主に③と④に該当するが、実施年度によっては、①と⑤についても中央図書館で実施していた。③は「金曜の会」と呼ばれ、コミュニケーション能力の向上を目的としていた。2014 年度の実施要領には開催目的として「人との付き合い方がわからない、仲間を作りたい、なかなか外に出られない、何をしたいかきっかけがつかめない、などコミュニケーション力を身につけることを目的として実施する」と記されている。また、対象者については「15 歳から 39 歳までの一定期間無業状態にあり、またコミュニケーションに問題を抱えており、かつ就業を目指している若者」とされていた。

④は「若葉の会」と呼ばれ、図書館での職場体験が該当する。2014 年度の実施要領では開催目的として「ビジネスやルールを学んだり、奈良市立中央図書館での見学・体験を交えてビジネス文書や履歴書の書き方、面接のロー

表1　なら若者サポートステーションの事業内容

番号	プログラム	対象者	対象者の段階	目的	目標数値
①	コミュニケーション講座	当事者	1,2,3,4	文書や履歴書の書き方、模擬面接を踏まえ社会人基礎力の向上を目指す	5名×5日=25人
②	職場見学会	当事者	1.2.3	職場を見学し、職場のイメージを持つ	5名×7回=35人
③	金曜の会	当事者	1,2,3	就活を始めるための基本的なコミュニケーショントレーニング	5名×4日×2回=80人
④	若葉の会	当事者	2,3	職場体験を通じ、当事者と仕事を結び付けていく	5名×4日×2回=40人
⑤	親こころ・サポステ説明会	家族	1,2	我が子がひきこもる状態の理解や新たな気づきの機会提供 ＊個別相談会を含む	10名×6回=60人

1) 対象者の段階は、次の通りである。　　＊筆者作成

1,進路についてイメージや関心がない。　2,進路についてイメージや関心がある。　3,進路について方向性が見えてきている。

4,進路について方向性が見えてきた上で、行動することができる。

2) ⑤は該当の子どもの段階を指す。

ルプレイなどを行い就職に向けてサポートすることを目的として実施する」と記されている。また、対象者については「15 歳から 39 歳までの一定期間無業状態にあり、就業を目指しているものの、具体的に求職活動の方法が分からない等の課題を抱えた若者」とされていた。

サポートステーションの事業では、職場見学会のように多様な職業への理解を広げるプログラムや、講習会・相談会のように課題への理解を深めたり相談したりする機会は複数の場所で実施されていた。一方で、基本的なコミュニケーショントレーニングや、実際の就職を意識した職場体験については、図書館がその実施場所として用いられていた。

以上、中央図書館ではサポートステーションと協働し、2 年間に渡り若者の自立支援が行われていたが、2015 年度には中央会が厚生労働省から地域若者サポートステーション事業を受託できず事業は終了した。

3.2 2013 年度の事業概要

資料には、2013 年度に実施した事業として「金曜の会」「若葉の会」が記載されている[27]。実施状況は、表 2 の通りである。

表2　2013年度「金曜の会」「若葉の会」実施状況

2013年度							
年齢	性別	金曜の会		若葉の会	レベル		進路決定
		第1期	第2期		初回	年度末	
27	男	○			2	5	○
36	女	○			2	5	○
32	女	○		○	2	4	
31	男	○	○		2	2	
24	男		○	○	1	2	
23	不明		○		1	4	
27	不明		○		4	5	○
26	男			○	不明	不明	
23	男			○	4	3	
28	不明		○		1	5	○
25	不明		○		2	3	
39	男			○	2	4	

1) 金曜の会の実施日程については、次の通りである。
第1期　6月14日、28日、7月12日、26日、8月9日、23日
第2期　9月27日、10月11日、25日、11月8日、22日、12月13日

2) 若葉の会の実施日程については、次の通りである。
12月25日、1月7日、8日、28日、2月5日

3) レベルについては、次の通りである。なお初回のレベルは、サポートステーションへの初来所時に判定され、事業の実施を通じてスタッフによりレベルの推移が測定される。
レベル1：進路についてのイメージがなく、興味や関心もない。
レベル2：進路について漠然としたイメージを持ったり、興味や関心が出て来た。
レベル3：進路についての方向性が見えてきて、情報収集はできるが、進路決定のための行動には移せていない。
レベル4：進路の方向性が見えてきた上で、就職や進路決定に向けて具体的に動き始めることができる。
レベル5：進路決定（就職や進学など）

表は事業報告書を元に、実際のプログラムや実績表の内容を合わせて筆者が作成した。

まずは「金曜の会」について整理する。サポートステーションは、中央図書館で事業を実施するまでは、屋外での活動を通じ、主として体を使って自分を表現するプログラムを実施していた。実績として、2010 年度「奈良公園・奈良町散策」、2011 年度「体を動かし身体感覚に意識を向けよう」、2012 年度「絵画・造形により自己を表現しよう」というテーマであり、個人作業が中心であった。しかし「結果、クライエントが抱えている課題の克服等進路決定に繋がりにくかった」ことから「図書に触れること（特に絵本）により、自分が素直になれること等改めて、自分を見つめなおすきっかけになることも知る」という試みを始めたとされている[28]。表 2 によると、事業の結果として、1 名の参加者のレベルには変化がないと評価されたものの、他の 8 名の参加者はレベルアップしたと支援者は評価しており、4 名の進路が決定している。

次に「若葉の会」について整理する。「若葉の会」の目的として「「金曜の会」を一歩進めて、グループでステップアップできるように、より具体的に職場体験（図書館での体験）を交える」という記載がある[29]。「金曜の会」が基本的なコミュニケーショントレーニングの場であり「若葉の会」は職場体験といった、より就労を意識した事業という位置づけであった。

「若葉の会」の日程は 5 日間である。初日はプログラムの説明と図書館で業務を行う上での心構えを説明している。その後、2 日間連続で図書館での職場体験を実施している。最後の 2 日間は「就職活動をするための基本的な項目（お礼状・履歴書作成、面接）を交えて体験する」ことを目的として、職場体験の振り返りと、お礼状の作成や模擬面接を行っていた。事業の結果として、1 名の参加者がレベルダウンしたと評価されたものの、3 名の参加者がレベルアップしたと支援者は評価している。

3.3 2014 年度の事業概要

2014 年度を総括する内容が記載された資料には「金曜の会」「若葉の会」を含めて、4 つの事業が報告されている[30]。まず、2014 年度の事業概要の中で、図書館での体験活動に関係する「金曜の会」「若葉の会」についての実施状況は、表 3 の通りである。レベルの内容は表 2 と同様である。次に、2014 年度の「サポートステーション」の 4 つの事業を整理する。

第 1 の事業としては「職場ふれあい事業」であり、資料には、職場体験への参加に向けての下準備という記載がある。具体的には「職場見学会」や「コミュニケーション講座」として、合計 7 日間実施されているが、テレビ局への見学や商業施設での体験、文書の書き方の学習といった内容であり、中央図書館は事業開催の場所とはなっていない。

第 2 の事業は「ジョブトレーニング事業」であり「若葉の会」が該当する。資料には「職場体験を含めて、就職活動に向けてのマナー、履歴書の書き方、面接の受け方等を体験的に学ぶ」と記載があり、年 2 回、1 回 4 日間（職場体験は 2 日間）の開催としている。会場は中央図書館である。事業の結果として、5 名の参加者のうち 2 名の参加者のレベルには変化がないと評価されたが、3 名がレベルアップしたと支援者は評価し、進路も決定している。

第 3 の事業は「保護者を対象とした講習等」であり、さらに 2 つの事業に分かれていた。1 つは「若者サポートステーションやまと」との共同開催で「若者自立支援セミナー」を年に 2 回実施していた。この事業は奈良市とは別の市で開催しており、中央図書館は事業開催の場所とはなっていない。もう 1 つは「親こころ・サポステ説明会」である。事業の内容は「親と子ども（就活での課題を抱えている子）の接し方等の新たなアプローチ・気づきへのきっかけとなる機会を提供する」とある。実施場所は、中央図書館である。実施状況は表 4 の通りである。

資料には「会場を図書館の枠組みを活用して家族の思いをお聞きしています」という記載があった[31]。この「図書館の枠組み」という言葉の理解であるが、説明会の際に実施されたアンケートには「どのようにして今回のイベントを知ったか」という質問に対して「図書館の掲示板」や「中央図書館に置かれていたチラシ」と回答している参加者が見られた。また「奈良市広報誌」と回答していた参加者も 2 名見られた。市立図書館が相談会に参画したことで、奈良市の広報誌にもイベントの案内を記載することにつながったと推察できる。また回答の中には「こういう会があることを知りませんでしたので、家の中で煮詰まっていた気持ちが少しほぐれました」や「奈良県中小企業会館の建物は駅前なので見たことがあったが、2 階にこのような活動をする団体があることは知らず、1 つの情報が増えて精神的なよりどころになった」という回答があった。奈良市民にとって身近な図書館が参画して会場を提供することで、子どもの自立に悩む家族との接点作りに貢献していたと考えられる。

第 4 の事業は「その他支援対象者の職業的自立にとって有効性が見込まれる事業」であり「金曜の会」が該当する。「小集団でのコミュニケーション体験」と説明があり、場所は中央図書館である。事業の結果として、5 名の参加者のうち、1 名の参加者がレベルアップと評価され進路が決定し、2 名の参加者のレベルは変化なしと支援者に評価

され、障害者支援施設へ通所することが紹介されている。　　詳細を確認することができなかった。
さらに 1 名は支援を中断し、もう 1 名はレベルアップの

表3　2014年度「金曜の会」「若葉の会」実施状況

2014年度										
年齢	性別	金曜の会				若葉の会		レベル		進路決定
		第1期	第2期	第3期	第4期	第1期	第2期	初回	年度末	
33	男	○	○	○		○		2	5	○
22	女					○		3	5	○
35	女					○		3	3	
32	不明		○					2	2	中断
26	不明			○				2	2	紹介
23	男						○	3	3	
33	男						○	3	5	○
23	女			○	○			2	2	紹介
32	男				○			不明	不明	

1) 33歳の男性は、昨年度から継続して参加している。

2) 金曜の会の実施日は、次の通りである。

第1期　5月9日、16日、23日
第2期　7月11日、18日、25日
第3期　10月10日、17日、24日
第4期　1月 9日、16日、23日

3) 若葉の会の実施日は、次の通りである。

第1期　6月24日、7月2日、3日、9日 （2, 3日は職場体験）
第2期　12月16日、17日 （職場体験のみ実施）

4) 紹介となっている2名は、障害者支援施設へ通所することの紹介である。

表は事業報告書を元に、実際のプログラムや実績表の内容を合わせて筆者が作成した。

表4 「親こころ・サポステ説明会」実施状況

2014年度							
年齢	親こころ・サポステ説明会						進路決定
	12月25日		1月22日		2月26日		
	説明会	個別面談	説明会	個別面談	説明会	個別面談	
23	○	○					紹介
24			○	○			紹介
24			○	○			紹介
39					○	○	紹介
30					○	○	再相談
32					○		
20					○	○	再相談
39					○	○	紹介

1) 紹介となっている5名は、障害者支援施設への紹介4名、医療機関への紹介1名であった。

表は事業報告書を元に筆者が作成した。

3.4 2015年度の事業企画書

中央会は2015年度の「地域若者サポートステーション」事業を受託することができなかったが、厚生労働省に提出された事業企画書から、中央会が想定していた支援の構造を確認することができる。以下は「平成27年度地域若者サポートステーション事業企画書」からの抜粋である[32]。

A.　個人面談によりクライエントが抱える問題を整理して、それを克服・解消を目指して、小グループでのワーク（金曜の会）に参加を促し、「図書の読み聞かせ」を通じて、コミュニケーション能力の向上・自己理解の醸成に繋げる。

B.　次に「若葉の会」での図書館での職場体験（図書の貸し出し・整理）を通じて、自信の回復に繋げる。

C.　更に「コミュニケーション講座」を実施して、コミュニケーションの更なる向上と、面接対策及びイオン奈良店の協力を得て、職場体験（商品の整理・棚卸・顧客の案内等）を通じて、社会人基礎力の向上と自信の回復に繋げる。

D.　以上の課題を克服できた段階で、中央会主催のインターンシップに繋ぐための、見極め等の面接を実施する。履歴書の書き方や面接対策等の具体的な就職準備支援を行い、インターンシップを利用して就職先事業所とのマッチングを図りながら就職に繋げる。

本資料は次年度の事業受託に向けて作成された企画書であり、中央会がこれまでの実践を踏まえて構想した支援プロセスを示す資料である。企画書に示されたAからCのプロセスは、2013年度及び2014年度に実施された事業内容と一定の対応関係がある。A及びBは3.2 及び3.3で示した「金曜の会」における絵本を用いたプログラム及び「若葉の会」において実施された職場体験に対応している。さらに、Cは2014年度に実施された「コミュニケーション講座」との連続性の中で理解することができる。

以上の対応関係から本企画書は、2年間の実践の成果を直接示す資料ではないものの、中央会が図書館を活用したプログラムを、就労支援へと至る段階的プロセスの初期段階として位置づけていたことを示す資料と解釈することができる。また、図書館での実践がA及びBの段階に配置されていることから、図書館での活動がより実践的な支援段階へと移行するための基礎的な位置づけを持つものとして、認識されていたことが示唆される。

ただし本企画書に示されたプロセスが、実際に2年間の実践の成果として形成されたものであるかは、本資料のみからは判断することができない。そのため、本企画書を用いた分析は、中央会が有効と認識していた支援の構造を示す範囲のものとする。

3.5 「金曜の会」におけるプログラムの詳細

本節では「金曜の会」について、実際のプログラム内容について整理していく。なお、資料の中で確認することのできた中央図書館の職員は、2013年度当時、中央図書館長であった林勝之氏のみであった。林氏は2013年度当時、中央図書館長、2014年度当時は退職後に再雇用された職員として、文書の中では林館長もしくは林元館長という名称で登場するが、本論文では林氏という名称で統一して表記する。

2014年度4期目のプログラムは、3日間に渡って実施された。実施時間は13時30分から15時30分の間であった[33]。初日である1月9日は、 Fさん（23歳女性）が参加した。中央図書館で行われ、図書館として林氏、サポートステーションとしては3名が参加している。最初に4階会議室で「他己紹介」として、2人1組で互いの氏名・特徴を紹介し合っている。F さんの声は小さかったものの、しっかりと相手に伝えることができていたという記録がある。プログラムを実施する中で「好きな食べ物」の話になり、全員でカレーライスの話をした。

次に3階児童室に移動し、絵本コーナーで絵本を探した。絵本は「自分の好きな本、もしくは冬にまつわる虫の本」を探すことになったが、全員が季節に関係なく虫の絵本を探していたようである。Fさんは、自分が小さい頃によく読んでいた絵本を探し当てて喜んでいたという記述がある[34]。その後スタッフを含む5名が、自分で選んだ絵本を読み聞かせている。F さんは読み聞かせを始めた際は、やや緊張が見られたが、徐々に慣れてきたのか、声にも力が入るようになった。声は小さいものの、興味のある絵本なので、しっかりと話せていたという記述がある。またF さんの表情には、明るさが見られたということであった。

2日目である1月16日は、中央図書館が所在する地域である「ならまち」を散策するという屋外活動からプログラムが始められた。参加者は、奈良の特産品や工芸品を展示・販売する「奈良町情報館」や「なら工藝館」を散策し、その後、中央図書館で「ならまち」を散策した感想を話し合った。Fさんは楽しそうにしていたが、特に食べ物の話題に興味を持って話をしていた。

3日目である1月23日は、Fさんに加え、新たにMさん（32歳男性）の参加があった。初めての参加者がいたことから、最初に全員で自己紹介を行い、2人1組となり

昨日楽しかったことを交互に話し合った。さらに児童室で絵本を探し読み聞かせを行った。F さんは「カボチャが空を飛ぶ」、M さんは「野菜の王様」という絵本を読んだ。スタッフも絵本を選び、読んだが、これらの絵本は、食べ物か料理に関係する絵本であった。

読み聞かせ体験の感想として、参加者（F さんと M さんの両方、もしくはいずれかの発言であるかを特定する記載なし）からは「経験したことのない読み聞かせを体験することができて、自分の思いが届く体験ができた。相手の考えを聞く体験ができたことが楽しかった」という感想が記載されている。F さんに関しては、プログラムの終了後、今後の進め方について、林氏を含めプログラムに関わったスタッフで話し合いが持たれている。プログラムを通してスタッフが観察している状況では、F さんが就職に繋がるというイメージを持つことができないということや、引き続きサポートステーションでの支援を継続して受けるのではなく、発達障害者支援センターでの支援が適切ではないかという意見が出た。サポートステーションスタッフと F さん及び F さんの保護者との面談を設定し、相談していくとの記載があるが、2014 年度の事業結果と照らし合わせると、F さんは障害者支援施設への通所が紹介されている。

2014 年 3 月 18 日には、サポートステーションと中央図書館との間で、2013 年度の事業結果と次年度の実施内容について話し合われている。会議の中で絵本を使ったプログラムの効果について、A さん（30 代男性）の事例が報告されている。年度を総括する資料に事例として報告されていることから、サポートステーションとしても絵本を活用したプログラムの成果に着目していたことが推察される。

A さんは 2013 年から、サポートステーションで相談するようになった。A さんは人と話すのが怖く、自宅にこもり続けるという状態であった。しかし、親から 31 歳にもなり、外に出ていくことも考えないといけないと言われ、サポートステーションに通うことになる。「人と会話したいのに人が怖くてなかなか前に進めない」という相談内容であったことから、人との関わりを得るために「金曜の会」に参加することになった。A さんが金曜の会に参加する中で転機となった出来事がある。報告書に記載のあった一文を引用する。

「金曜の会に参加して、絵本の読み聞かせを体験してみて、自分の声が参加者に届いたこと……参加者の目に涙が浮かんでいて……この体験がとても大きく、今の保育所での活動に繋がった」

2013 年の暮れから 2014 年にかけて、A さんは音楽に興味があったことから、先輩の助言で苦しかった頃の自分について詩を作り、先輩が作曲し、音楽にすることができた。また同時に、A さんの父親の友人が近所で保育所を運営していたことから、ボランティアとして保育所で子どもたちと音楽を交えて遊ぶことになった。

本事例に対するサポートステーションスタッフのコメントとして「人との関わりに恐怖を抱いていたクライアントが、金曜の会で図書に触れたことから、自分の声が相手に届くことを体験（知ることが）でき、そのことが現在の保育所での活動に繋がった。図書館を利用することにより、貴重な体験（声を届けること、感動を与えること）ができた」との記述がある[35]。

3.6 「若葉の会」におけるプログラムの詳細

本節では「若葉の会」について、実際のプログラム内容を整理していく。2014 年度 1 期目のプログラムは 4 日間（各回 14 時から 16 時の間実施）に渡り行われた[36]。初日である 6 月 24 日は、男性 1 名、女性 2 名の参加者があった。スタッフは中央図書館から林氏、サポートステーションから 3 名が参加した。初回はガイダンスであり、全員で「自分を動物に例えると」というテーマで挨拶をした。その後、今回のプログラムの概要や、図書館で職場体験を実施するに当たり、心がけることなどについての説明があった。

2 日目（7 月 2 日）と 3 日目（7 月 3 日）は図書館での職場体験であった。参加者は、児童室や一般室のカウンターで本の貸出や返却といった利用者対応、書架への本の配架、新聞のファイリングといった資料整理を体験した。また、児童室の「おはなしの部屋」で行われたおはなし会を見学した。さらに、林氏からは仕事の取り組み方や自身の職業経験、職場での人間関係に関する講話が行われた。

4 日目である 7 月 9 日は、会議室で職場体験の振り返りを行い、参加者からは「緊張した」という声が多かったが「自信がついた」「コミュニケーションの練習になった」などの感想があった。その後、林氏を交えた模擬面接と、図書館職員に宛てたお礼状の作成が行われた。参加者の振り返り用紙には、プログラムから学んだこととして「相手の立場になり、仕事をする大切さ」や「人の顔を見て、話をする大切さ」などの記述が見られた。また、全員が「この体験は有意義だった」に最高評価を付けていた[37]。

さらに、2014 年 1 月 28 日に中央図書館職員宛として書かれたお礼状の中には、参加者から見た図書館について記された文章があった[38]。

「図書館には気持ちを落ち着かせたり、読みたい本が

ある以外は行きませんが、今回この図書館を案内していただいて視野が広がって、いい経験をさせていただきました」

この一文から、図書館という場がこの参加者にとって「気持ちを落ち着かせる場」として位置づけられていたことが分かる。

3.7 文献調査で明らかとなった課題

本章での文献調査の結果、中央図書館で実施された若者の自立支援について、プログラムの構成や実施状況、参加者の変化に関する記述を確認することができた。一方で、本章で用いた資料は、サポートステーション側が作成した実施報告や記録であり、事業の全過程を網羅的に示すものではなく、図書館側の意図や評価を十分に把握することには限界があった。

以上の点を踏まえると、文献資料のみからは、支援の全体像及び一定の成果を把握することは可能であるが、図書館で実施された事業の設計意図については十分に明らかにすることができない。この点を補完するため、次章では聞き取り調査を通じて、図書館側の視点から支援の実態を明らかにする。

4 聞き取り調査

本章では、事業に関わった人物に聞き取り調査を行い、事業の内容を確認する。

4.1 事業実施責任者に対する聞き取り調査

聞き取り調査は、事業の実施当時、中央図書館長であった林氏に対して行う。林氏は 2013 年度に中央図書館長、2014 年度は再任用職員として中央図書館に勤務していた。2016 年度は奈良県平群町立図書館長を務め、2025 年 12 月現在は奈良県斑鳩町立図書館長である。

聞き取り調査は 2025 年 12 月 28 日に行った。調査場所は中央図書館応接室、調査時間は 1 時間 30 分であった。調査方法は半構造化インタビューの手法を用いて行った。以下に各設問と聞き取り調査にて得られた回答を要約して記述する[39]。

①中央図書館でひきこもり支援を行うことになった経緯は何か

2012 年度以前、サポートステーションは屋外で体を使ったプログラムを中心に活動しており「奈良公園」や「ならまち」での散策などを行っていた。そうした活動場所の近くに中央図書館が所在していたことから、活動場所の 1 つとして、図書館内の場所（会議室等）を貸してほしいという申し出がサポートステーションからあった。館長であった林氏は、図書館による障害者支援といった事業に関心があり、申し出を受諾した。その際に、図書館を実践の場所とするのであれば、本を使ったものにしてはどうかと、林氏の方から提案した。

②絵本をプログラムに活用しようと思いついた理由は何か

林氏は司書資格を持たない事務職の職員として奈良市に採用され、福祉部門で高齢者に対するケースワークを 11 年間行っていた。その際に、コミュニケーションの 1 つに絵本を用いたところ、 高齢者から良い反応があった。その後、税務部門に 5 年間勤務した後、中央図書館に異動となる。図書館への異動当初は、本庁勤務に戻りたいと思ったが、北部図書館の開館計画に携わるようになり、司書の資格を取得し、図書館情報学のことを勉強するようになった。

北部図書館の開館後は、学校図書館支援の中で特別支援学級の子どもたちと関わりを持つようになる。発達障害などを持つ子どもたちに対し、絵本を読み聞かせると喜んでくれ、みんなで読みあうという光景を目にする。

③プログラムの中で食べ物の絵本を選んでいた回があったが、参加者に絵本を選んでもらったのか、食べ物に関する絵本をスタッフ側で選んでおいたのか

参加者自身で絵本を選んでもらった。当時のサポートステーションのプログラムは、集団でのプログラムを前提としていた。プログラムを実施していく上で、参加者の個性を見極めることが大切であると林氏は考えていた。集団活動の中で、参加者が持っている個性を発揮させ、得意な所と苦手な所を見つける。家族にとっても、子どもの特性を決めつけてしまっていることがあり、そのことが子どもを追い詰め、ひきこもりにつながっていることがある。

「金曜の会」でカレーライスの話をした参加者の事例があったが、その参加者は集団の中で食べ物の話になると生き生きと話をしていた。自分が好きな話、得意な話の場合は、その集団の中で主役になることができる場合がある。そうした体験も、絵本が楽しいと感じることに繋がる場合がある。

④絵本をコミュニケーション能力向上に用いた効果をど

のように考えているか

絵本は文字と絵で構成されている。ひきこもっている子の中には、言葉でのやり取りが苦手な子もいる。そこで、絵という視覚情報が有効な場合がある。絵本は単純な言葉で、会話や状況描写についてもシンプルに書かれていることから、余計な感情移入をする必要がなく、すべてを伝えようとしている。こうした特性は、子どもや高齢者、知的障害や認知症がある人にとっても効果がある。

コミュニケーション能力を向上させるプログラムは、図書館と協働する前のサポートステーションが行っていたように、体を使ったプログラムもある。しかし、運動をする場合は、体を動かすのが得意・不得意な子の差、会話を中心とした場合は、話す子と話さない子の差といったものが出てくる場合がある。図書館という共通の場で、絵本という共通のツールを使うと、みんなで話をするきっかけとすることができるようになる。

絵本の読み聞かせをする時や、なぜこの本を選んだのか、といったことを話す時は、事前のルールとして、発表中は静かに聞くということを始めに決める。相手の話を聞くということは、相手を認め理解することに繋がる。自分を理解してもらうために相手を理解する。それが一番簡単なのは「発表してはる時は、ちゃんと聞こうよ」という約束事を決めることである。

⑤プログラムについて(誰がプログラムを立案したか、プログラムの進行、サポートステーションとの役割分担はどのようにしていたか)

中央図書館で実施した「金曜の会」「若葉の会」のプログラムは、林氏が立案し、進行を務めた。林氏がプログラムを進行する中で、参加者の言葉が詰まる場合は、サポートステーション側の臨床心理士がフォローに入り、言葉を誘引する。この役割分担は、プログラムの実施者である林氏が誘導を行うと、参加者への押しつけになる可能性を考慮したからであった。林氏は「学校の授業のようにはしない」ということを意識していた。プログラムとして結論を出すことを誘導せず、結果として収まりが悪かったとしても、プログラムに子どもたちが関わり、行った過程を重視していたということである。

⑥なぜ 2 年間で事業が終了したのか

中央会が地域若者サポートステーション事業に採択されなかったのは、就労に結びついた件数が少なかったからである。実施した事業によって、参加者の「レベルアップ」という形で効果を示すことができたが、他に応募する団体がある中で、就労件数が多くなかったことが、厚生労働省からの評価を下げる要因となった。

⑦図書館として、資料に記載のある職場体験と絵本を使ったプログラムの他にひきこもり支援に関して何か取り組みを行ったか

「短期間のアルバイト」として、希望者を雇用した。これは「金曜の会」や「若葉の会」に続く段階の取り組みであると林氏は考えている。2014 年に図書館の IC 化を進めるための事業として、短期アルバイトを雇用していたが、その人員として「金曜の会」「若葉の会」の参加者からも 3 名を雇用していた。作業内容は、図書に IC タグを貼り付け、書誌情報を書き込むというものであった。本事業は図書館の事業であり、サポートステーションの事業ではないため、サポートステーション側の資料には記載されていない。

⑧図書館でひきこもり支援を行う課題をどう考えるか

人と人との関係を作り、こうした関係作りの広がりが、地域を作ることに繋がる。これが地域教育である。図書館における地域教育とは、本を媒介として、こうした仕組みを作ることである。図書館でひきこもり支援を行うことの意味は、本を使って人をつないでいき、本を使って地域の課題を解決していくことである。しかし、図書館のサービスが「本の貸出」を唯一のものであるかのように認識している状態では、今回行ったようなひきこもり支援は、市や図書館といった組織からの理解を得ることはできないと林氏は考えている。

今回の事業では、林氏が館長としてプログラムに参画することで実績を作り、奈良市や中央図書館という組織に対して理解を求めていく予定であった。今回の事業のような支援は、図書館としては新たに付加される事業となることから、図書館職員のひきこもり支援に対する理解が必要なことや、予算措置も必要である。図書館が支援団体と協働せず単独で事業を実施する場合でも、臨床心理士といった福祉分野に長じた人材を確保し、事業に関わることが必要であると林氏は考えている。

⑨事業の実施から 12 年が経過し、何か思うことはあるか

図書館は個人での利用に重点が置かれがちであるが、今回の事業では集団での活動を前提として事業を実施した。図書館法にあるように、図書館においても集会活動の事業は大切であると考えている。集会活動を前提としているのは公民館ではあるが、図書館には多くの本がある。近年、まちづくりの活性化を主軸に置いた図書館が増えているが、図書館には本があることを意識し、社会教育と

して、図書館がすべきことをやっていきたいと林氏は考えている。

⑩平群町や斑鳩町でも、ひきこもり支援を何か行っているか

平群町立図書館では、奈良県の動物愛護センターと協力してドッグセラピー（林氏の言葉では「ワンドク」）を行っていた。現在は「ワンドク」の事業を民間団体として活動を継続しており、奈良県内の図書館や公民館などで活動を実施している。参加者にはひきこもりの子もいるが、ひきこもり支援に特化させずに多様な人を対象とすることで、ひきこもりの人たちでも参加しやすい環境を作っている。

4.2 聞き取り調査で明らかとなったこと

中央図書館が若者の自立支援を行ったきっかけは、サポートステーションから活動場所提供の申し出があったことであった。中央図書館としても、障害者支援を始めとした福祉分野に対する支援の必要性を認識していたことから、場所を貸すだけではなく、協働してプログラムを実施するようになった。

林氏は、支援プログラムを実施するためには、臨床心理士といった福祉に長じた人材との連携が必須であると考えていた。サポートステーションと協働で事業を実施している間は、中央図書館としても自立支援事業に携わることができたが、地域若者サポートステーションを受託していた中央会との連携がなくなったことで、中央図書館での実践は終了した。

絵本を使ったプログラムについても、図書館側が意図していた効果などが明らかとなった。参加者の個性を考慮し、絵本を参加者共通のツールとすることで、コミュニケーションを誘発するツールとして絵本を活用していた。

また、就労体験として「IC タグの貼り付け作業」が実施されていた。「金曜の会」でのコミュニケーショントレーニング、「若葉の会」での職場体験、「IC タグの貼り付け作業」での一時的な就労という流れを図書館の中で実施することができたことは、単一事例として限定的ではあるが、自立支援のためのモデルとして示唆を含んでいると考えられる。

5 考察

5.1 若者の自立支援事業の成果

本節では、研究課題 1 の考察として、第 3 章及び第 4 章で明らかとなった中央図書館の実践事例について、その成果を整理・評価する。

5.1.1 「金曜の会」の成果

サポートステーションは、当初は体を使って自分を表現するプログラムを実施していたが、参加者の課題の克服や進路決定に繋がりにくいという課題があった。そこで中央図書館と協働で事業を実施することで「図書に触れること（特に絵本）により、自分が素直になれること等改めて、自分を見つめなおすきっかけになることも知る」という試みを始めた。

数値的な結果として、2013 年度は 9 名の参加者のうち 1 名の参加者のレベルには変化がないと評価されたが、8 名の参加者がレベルアップしていると支援者は評価し、4 名の進路が決定している。一方、2014 年度は 5 名の参加者のうち、2 名の参加者のレベルには変化はないと評価されたが、1 名の参加者はレベルアップしていると支援者は評価し、この参加者は進路も決定している。ただし、資料を整理すると、2013 年度ではレベルに変化がなかった参加者と、2014 年度ではレベルアップし進路が決定した参加者は同一人物であり、この参加者は 3.5 の事例にあった A さんであった。A さんは年度をまたぎ継続的に事業に参加したことで、大きくレベルアップしたという評価となっている。このレベルアップの転機は、3.5 の説明では、絵本の読み聞かせ体験によるところが大きいということであった。

以上の結果を総合すると、年度間で成果の現れ方には差が見られ、特に 2014 年度においてはレベルアップと評価されている人数が限定的であったことから、本事業の効果が一様に発現しているとは言い難い。この点については、参加者の特性や事業実施条件の違いなどが影響している可能性が考えられる。ただし、サンプル数が限られている中においても、一定数の参加者においてレベルアップという評価や進路決定が確認されている点は注目に値する。ひきこもり支援においては、短期間での大きな変化が必ずしも前提とされるものではなく、わずかな変化であっても当事者にとって重要な意味を持つ場合がある。したがって、本事業の数値的成果は限定的ではあるものの、少なくとも一部の参加者において状況の改善や社会参加への契機が確認されたという点で、初期段階の支援として一定の意義を有している可能性がある。

また、本事業の成果を評価するにあたっては、就労や進

路決定といった到達点のみではなく、コミュニケーション能力の向上や自己理解の深化といった過程的な変化を含めて捉える必要がある。A さんの事例においても、2013 年度はレベルアップという評価には結びつかなかったが、過程的な変化を経ることにより、2014 年度はレベルアップという評価を得、さらに進路決定に至った。

5.1.2 「若葉の会」の成果

「若葉の会」は、職場体験を中心とした社会性の向上を目的としたプログラムであった。職場体験の内容として、閲覧室カウンター内での図書の貸出や返却といった利用者対応、書架への本の配架、新聞のファイリングなどの資料整理作業が主な業務であった。職場体験に前後して、仕事をするための心構えの講習や、お礼状の作成、模擬面接といったことも実施されていた。

数値的な結果として、2013 年度は 5 名の参加者のうち、1 名の参加者がレベルダウンしたと評価されたものの、3 名の参加者がレベルアップしていると支援者は評価している。また、2014 年度は 5 名の参加者のうち、2 名の参加者のレベルには変化がないと評価されたが、3 名の参加者がレベルアップしていると支援者は評価し、3 名とも進路が決定している。以上の結果からは「金曜の会」の結果と同様に、本事業の効果が一様に発現しているとは言い難いが、一定数の参加者においてレベルアップしたという評価や進路決定が確認されている。本事業の数値的成果は限定的ではあるが、一部の参加者において状況の改善や社会参加への契機が確認されたという点で、支援として一定の意義を有している可能性がある。

また、参加者が記入した「振り返り用紙」には「この体験は有意義だった」と回答していたことが確認されており、参加者にとっては、自立に向かうための貴重な経験となっていたと考えられる。

5.1.3 本事業の成果の再整理とひきこもり支援への接続

本項では本事業の成果について「就労・進学」といった最終的な結果のみに依拠するのではなく「行動・社会参加」「コミュニケーション」といった参加者の過程的な変化、「支援機関への接続」といった適切な支援の再配置、「家族支援」といった当事者の周辺環境への支援といった視点から再整理を行う。その上で、当該事業をひきこもり支援の観点から再定位する。評価の枠組みとして整理したものが表 5 である。

表 5　評価枠組みの整理

成果指標	指標の内容	主な対象
就労・進学	就労、進学、進路決定	参加者
行動・社会参加	外出、継続参加、集団活動、対話、役割行動	参加者
コミュニケーション	自己表現、感情表出、他者理解、関係形成	参加者
支援機関への接続	支援機関への紹介、通所、支援継続	参加者
家族支援	家族の情報取得、相談機会、心理的負担軽減	家族

＊筆者作成

(1) 就労・進学

数値的な結果として、2013 年度は 9 名中 4 名、2014 年度は 5 名中 1 名の進路決定が確認されている。また、一部の参加者については障害者支援施設への接続が確認されている。一方で、年度間で成果に差が見られること、及び対象者数が限定的であることから、本事業の成果は限定的に確認された結果指標として位置づける必要がある。また、図書館プログラム単独の効果として因果的に評価することは困難である。

(2) 行動・社会参加

本事業では、図書館を拠点とした活動を通じて、以下のような社会参加の機会が確認されている。

・図書館への来館及び継続的参加
・グループ活動（自己紹介、ペアワーク等）
・他者との対話、共同作業
・地域内での活動（まち歩き）
・図書館業務を用いた職場体験

これらは、ひきこもり状態にある者にとって重要な「他者と同一空間で活動する経験」を提供するものである。一方で、これらの社会参加によってもたらされた数値的な変化については、資料からは確認することができない。

(3) コミュニケーション

本事業では、特に絵本を媒介としたプログラムを通じて、以下のような変化が確認されている。

・読み聞かせによる自己表現の経験
・「自分の思いが届く」「相手の考えを聞く」といった

体験

・発話や表情の変化

これらは、直接的なコミュニケーションが困難な参加者に対して、媒介（絵本）を通じた間接的な相互作用を成立させ、心理的・関係的変化の契機として機能していたと考えられる。ただし、これらの変化は個別事例に基づくものであり、数値的な変化については、資料からは確認することができない。

（4）支援機関への接続

本事業では、就労・進路決定に至らなかった場合にも、次の支援段階への接続が行われている。

・発達障害者支援センターへの接続提案
・障害者支援施設への接続提案
・サポートステーションでの継続支援

これは支援対象者の状態に応じて適切な支援へと再配置する機能が働いていたことを示しており、結果指標に含まれないものの、支援として重要な成果である。一方で、接続後の支援の成果については、資料からは確認することができない。

（5）家族支援

本事業では、保護者を対象とした説明会やセミナーが実施されており、以下のような効果が確認されている。

・家族への情報提供
・家族の心理的負担軽減
・当事者が支援機関を利用するための導入口
・支援機関の認知向上

図書館という公共空間を活用することで、支援へのアクセスのしやすさが確保されていた点は重要である。一方で、本支援が当事者の支援機関の利用に結び付いた事例は個別的に確認することができるものの、支援機関に結び付いた総数や家族関係そのものの変化については、資料からは確認することができない。

ここまでの整理から、本事業の成果は、就労・進学という最終的な成果に限定されるものではなく、複数の水準から捉える必要がある。まず、就労・進学といった進路決定は、一部の参加者において限定的に確認された。また、進路決定には至らない場合であっても、図書館でのプログラム参加や職場体験を通じて、行動面での社会参加や、心理面・対人関係面での変化が一定程度確認された。さらに、本事業は参加者をより適切な支援機関へつなぐ契機となったほか、家族が支援情報に接する機会を生み出すなど、当事者本人への直接的支援にとどまらない補完的な機能も有していた。これらを総合すると、参加者にとっての本事業の直接的な意義は、単に就労成果に還元されるものではなく、就労に至る前段階における過程的な変化の生成と、適切な支援への接続機能に見いだされる。

以上の実践事例として整理された成果を踏まえると、本事業は、ひきこもり支援の段階論における「社会との再会段階」において、当事者に対して社会的接点を提供する中間的・過渡的な場として機能していた可能性がある。

5.2 若者の自立支援における図書館のリソース

本節では、研究課題２の考察として、第３章及び第４章の調査結果を踏まえ、前節で整理した成果がどのような要因によって生み出されたのかを検討する。具体的には、公共図書館に固有のリソースである「資料」「司書」「場」に着目し、それぞれが本事業においてどのように機能していたのかを明らかにする。

5.2.1 絵本という資料

本事例では絵本を使い、コミュニケーション能力を向上させる取り組みが行われていた。絵本を使った実践は、以下の２つの側面から整理することができる。

① 絵本から得られる情報による若者の内面の変化
② 絵本というツールを媒介としたコミュニケーション能力の改善

まず①については先行研究として、松尾直博は、中学生の読書を対象として本と自己意識の変化との関係に着目し分析している[40]。これに対し、②についての研究として、佐々木宏子は、絵本から幼児が言葉を学ぶという側面を認めつつ、絵本の内容よりも絵本を媒介とした形式に着目した考察を行っている[41]。

本事例では、上記①、②の視点が含まれるが、先行研究との違いは絵本の内容によって内面が変化するのではなく、絵本を媒介として、読み手と聞き手の関係性を構築することによって、自己意識の変化を促すという点である。3.5 の A さんの事例では、絵本を使ったプログラムが契機となり、保育所での活動に繋がっていた。これには、絵本の読み聞かせによって「自分の声が参加者に届き、参加者の目に涙が浮かんでいた」という経験が大きな役割を果たしたということであった。

大坊郁夫はコミュニケーションの伝達手段として、音声的なものと非音声的なものに分類しており、さらに細かく 6 通りに分類している[42]。大坊の指摘を参考にし、A さんの事例を表したものが図 3 である。

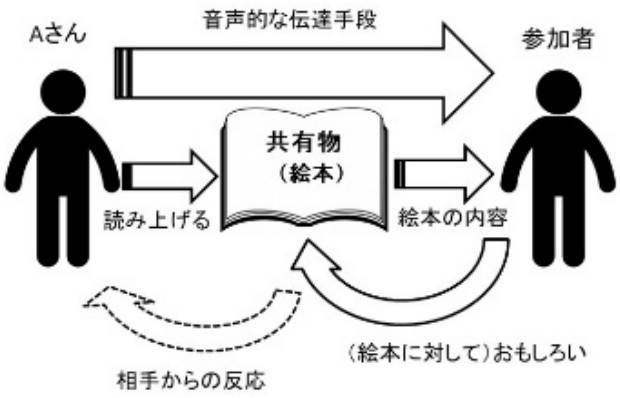

図 3　絵本を媒介としたコミュニケーション
＊筆者作成

A さんは絵本を媒介として、声によって参加者に情報（絵本の内容）を届けている。この時、A さんは「絵本を読む」という行為を行っており、参加者は「絵本を見て、聞く」という行為を行っている。A さんと参加者の行為は、それぞれが完結していながらも「絵本を読む」「絵本を見る、聞く」という行為が全体として「絵本の読み聞かせ」という 1 つの行為を成している。本事例では、A さんの声によって届けられた絵本の物語が、参加者に「涙を流す」という行為を引き起こすことで「自分の声が相手に届く」という体験を A さんに経験させ、社会との接点を持つ行動につながっていった。

本事例で見られた「声を届ける」という経験は、3.5 の F さん、M さん事例にも「読み聞かせを体験することができて、自分の思いが届く体験ができた。相手の考えを聞く体験ができたことが楽しかった」という記述があった。本研究では「声や思いを届ける」経験を確認することができたのは 2 例のみであったが、A さんのように社会との接点を失っているひきこもり当事者にとっては、絵本を活用したコミュニケーショントレーニングは、選択肢の 1 つとなり得る可能性を示唆している。

5.2.2 支援に対する意識と資料に精通した司書

本項では中央図書館の実践事例において、司書（図書館職員）の専門性がどのように機能したのかを考察する。本事例では、図書館職員が単に場所や資料を提供したのではなく、若者の自立支援に対する理解を踏まえ、資料の特性を活かしたプログラムを構想していた。

本事業は、当時館長であった林氏の主導によって実施された。林氏は司書資格を有し、図書館サービスに関する知識と実務経験を備えていた。加えて、福祉部門での勤務経験や、障害のある子どもたちと関わった経験を通じて、自立支援に対する一定の理解も有していた。こうした図書館サービスに関する専門的知識と福祉的視点の双方が、絵本を用いたプログラムの構想に反映されていたと考えられる。

前項で述べたように、絵本は、参加者が自分の声を他者に届け、相手の反応を受け取る経験を生み出す媒介として機能していた。絵本は、文章量が比較的少なく、絵という視覚的要素を伴い、読み聞かせという行為を通じて他者との関係を作りやすい資料である。林氏は絵本の特性を理解し、コミュニケーション支援の文脈に位置づけた点に、図書館職員の資料に関する専門性が認められる。

また、林氏はプログラムを「学校の授業」のように進めるのではなく、参加者が関わる過程そのものを重視していた。参加者の発話が滞る場面では、サポートステーション側の臨床心理士がフォローに入る役割分担がなされており、図書館職員が一方的に参加者を誘導しないよう配慮していた。このことから、本事例における図書館職員の役割は、参加者を直接的に指導することではなく、資料と空間を活用しながら、参加者が無理なく他者と関わることのできる場を整えることにあったといえる。

さらに、林氏は図書館でひきこもり支援を行う意味を、本を使って人をつなぎ、地域の課題を解決していくこととして捉えていた。この理解は、図書館サービスを単なる本の貸出に限定せず、地域の課題解決に関わる公共的サービスとして捉えるものである。本事例では、このような図書館観があったからこそ、サポートステーションとの協働が可能となり、絵本の読み聞かせや図書館業務の体験を、若者の自立支援のプログラムとして位置づけることができた。

5.2.3 「社会との再会段階」における図書館という場

本項では、公共図書館という「場」が、ひきこもり支援における「社会との再会段階」においてどのように機能したのかを考察する。「図 4　奈良市立中央図書館におけるひきこもり支援の諸段階」は、2.2 で示した図 2「ひきこもりの段階構造と自律・社会参加過程」を基に本研究で得られた結果を踏まえて作成した。

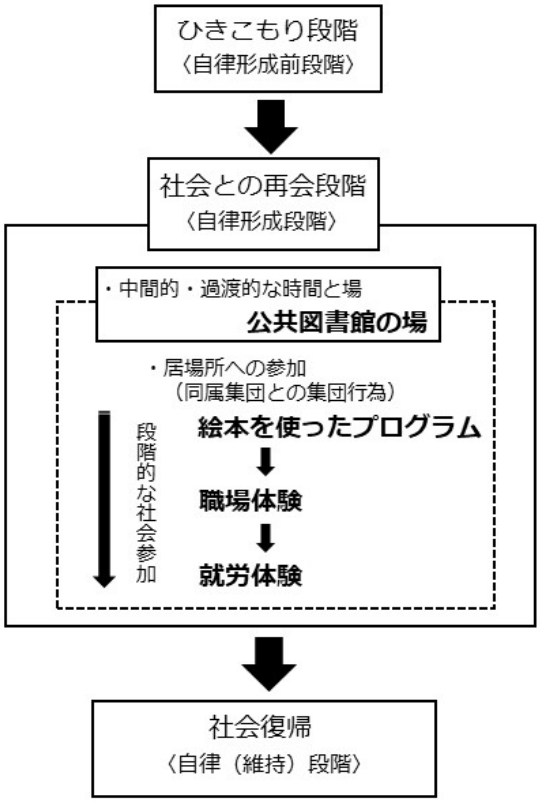

図 4　奈良市立中央図書館における
ひきこもり支援の諸段階

＊筆者作成

平田オリザは「図書館とコンビニだけは行ける」という層が一定数存在すると指摘している[43]。平田の指摘は、公共図書館という場が、支援を前面に出した施設とは異なる性格を持つことを示している。この点は、3.6 で示した参加者の礼状にも表れている。そこには「図書館には気持ちを落ち着かせたり、読みたい本がある以外は行きませんが、今回この図書館を案内していただいて視野が広がって、いい経験をさせていただきました」と記されていた。この記述から、図書館は当該参加者にとって「気持ちを落ち着かせる場」として認識されていたことが分かる。そのような場で職場体験や図書館案内を受けたことにより、図書館は単なる静かな滞在場所にとどまらず、視野を広げ、社会との接点を持つ場へと変化していた。また本事例では、会議室、児童室、おはなしの部屋、閲覧室、カウンター、作業室といった館内の複数の空間が、支援プログラムの内容に応じて活用されていた。これらは図書館という場が、静かに滞在する場所であると同時に、他者と関わり、役割を担い、働くことを試行する場にもなり得ることを示している。

さらに本事例では、図書館が単独で支援を担っていたのではなく、サポートステーションとの協働によってプログラムが成立していた。図書館は、心理的・福祉的支援の専門機関ではないが、公共的で利用しやすい場を提供し、資料や空間を活用した活動を可能にした。一方、サポートステーションは、対象者の状況把握や就労支援、必要に応じた他の支援機関への接続を担っていた。この役割分担によって、図書館は専門機関に代替する場ではなく、専門機関と若者をつなぐ中間的な場として機能していた。

6 総括

本研究の目的は、中央図書館における若者の自立支援事業の実態分析を通じて、ひきこもり支援における公共図書館の役割と貢献可能性を明らかにすることであった。そのために本研究では、本事例をひきこもり支援における「社会との再会段階（自律形成段階）」に対応する「若者の自立支援」として位置づけ、文献資料と聞き取り調査に基づいて、その内容を明らかにした。

第 1 の研究課題である「若者の自立支援事業の成果」については、進路決定や就労といった最終的成果に加え、参加者のレベルアップに見られる段階的な変化、自己表現の経験、他者との接触、支援機関への接続といった過程的成果が確認された。対象者数は限られており、年度によって成果の現れ方にも差があることから、本事業の効果を一般化して論じることはできない。しかし、一部の参加者にとって、社会参加への契機を提供した可能性は認められる。

第 2 の研究課題である「若者の自立支援における図書館リソースの解明」については「絵本という資料」「司書（図書館職員）」「図書館という場」が相互に組み合わさることで、支援の場が形成されていた。第一に、絵本は、参加者にとって選びやすく、読みやすく、他者に声を届ける経験を生みやすいメディアとして機能した可能性がある。

第二に、司書（図書館職員）は、資料と参加者、参加者と他者、図書館と支援機関を媒介する役割を果たしてい

た。本事例では、図書館職員が絵本の特性を踏まえてプログラムを構想し、参加者が無理なく発話や表現を行えるように場を設計していた。また、サポートステーションとの協働により、図書館職員だけでは担いきれない心理的・福祉的支援については、専門機関と役割を分担していた。

第三に、図書館という場は、参加者が比較的安心して社会的接点を持つための環境として機能していた。公共図書館は誰もが利用できる公共空間であり、支援機関を訪れることへの心理的抵抗を和らげ得る。本事例でも、会議室やおはなしの部屋、閲覧室、カウンター等を活用し、絵本の読み聞かせ、グループ活動、職場体験、資料整理作業が行われていた。また、図書館の掲示や広報を通じて家族が支援情報に触れる契機も生まれており、図書館は当事者本人だけでなく、家族と支援機関をつなぐ入口としても機能していた。

2 つの研究課題から導かれる図書館の意義は、絵本という資料、資料の特性を理解した図書館職員の関与、閲覧室や会議室などの図書館空間、サポートステーションとの協働関係が組み合わさることで、参加者が社会との接点を持つための中間的・過渡的な支援の場が形成されていた点にある。この点に、公共図書館がひきこもり支援に関与し得る意義が見いだされる。

本事例に固有の要素は、中央図書館とサポートステーションとの協働関係、両機関の距離的近接性、事業を主導した図書館職員の存在である。特に、絵本を用いたプログラムの着想や実施には、担当職員の経験や理解が大きく関わっていた。そのため、本研究は単一館を対象とした探索的な事例研究であり、本事例から公共図書館一般におけるひきこもり支援の有効性を直接示すことはできない。一方で、本事例が他の図書館でも応用可能な要素は、地域の若者支援機関や福祉機関と連携し、図書館を社会参加に向けた中間的な活動の場として活用する視点である。また、絵本や読み聞かせを用いたコミュニケーション支援、図書館業務を活用した体験活動は、他館においても参考となる可能性がある。ただし、その実施にあたっては、各館の職員体制、地域の支援機関との関係、利用可能な空間、対象者の状況を踏まえた調整が必要である。

以上より、中央図書館における若者の自立支援事業は、公共図書館がひきこもり支援において、社会参加へ向かう前段階の支援に関与し得ることを示した探索的事例である。本研究で明らかにしたのは、公共図書館一般の有効性ではなく、絵本という資料、司書（図書館職員）の支援意識と資料知識、図書館空間の公共性と利用しやすさ、地域の支援機関との連携が組み合わさることで「社会との再会段階」における中間的・過渡的な支援の場が形成され得るという点である。本事例は、ひきこもり支援における公共図書館の役割を考える上で、実践的な示唆を与えるとともに、今後の事例の蓄積と比較研究の必要性を示すものである。

注・引用文献

[1] 本論文では、行政及び学術分野における標準的な表記慣行及び当事者への配慮の観点から「ひきこもり」の表記を用いる。ただし、文献引用においては原文の表記を尊重する。

[2] 内閣府. こども・若者の意識と生活に関する調査（令和 4 年度）. 内閣府, p. 166, 184. https://www.cfa.go.jp/resources/research/chilren-attitudes（参照日: 2025-08-08).

[3] 15 歳から 49 歳までの人を対象とし、就労に結び付けることを目的とした厚生労働省委託の支援機関 https://saposute-net.mhlw.go.jp（参照日: 2025-08-14).

[4] 厚生労働省障害保健福祉部精神・障害保健課. ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. 厚生労働省, 2010, p. 2-3. https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12000000-Shakaiengokyoku-Shakai/0000147789.pdf（参照日: 2025-08-08).

[5] 厚生労働省社会・援護局地域福祉課. ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤～. 厚生労働省, 2025, p. 2.

[6] 孤独・孤立対策推進法(令和五年法律第四十五号). https://laws.e-gov.go.jp/law/505AC0000000045/（参照日: 2025-08-18).

[7] 内閣府. 孤独・孤立対策に関する施策の推進を図るための重点計画. 内閣府, 2024, p. 10, 18. https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/jutenkeikaku/pdf/jutenkeikaku_honbun.pdf（参照日: 2025-09-09).

[8] 図書館の設置及び運営上の望ましい基準（平成 24 年 12 月 19 日文部科学省告示第 172 号）. 文部科学省, 2012. https://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/1282451.htm（参照日: 2025-07-17).

[9] 文部科学省. 第 6 期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理（中間とりまとめ）. 文部科学省, 2012. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/attach/1325361.htm（参照日: 2025-08-22).

[10] 鳥取県立図書館. 【企画展示・一般】みんなで支え合う社会へ. https://www.library.pref.tottori.jp/exhibition/cat10/cat3/12-4.html（参照日: 2025-09-14).

[11] 多摩市立図書館. 『ひきこもり』パスファインダー. https://www.library.tama.tokyo.jp/images/upload/9_hikikomori.pdf（参照日: 2025-09-14).

[12] 岐阜県図書館. ひきこもり講座 2019 年 9 月 16 日開催. https://www.library.pref.gifu.lg.jp/info-events/2019/09/post-47.html（参照日: 2025-09-14).

[13] 高知ひきこもりピアサポートセンター. お知らせ. https://kochi-piacen.org/info/1357/（参照日: 2025-09-14).

[14] NPO 法人ぜんしん・柳川涼司. 図書館ボランティア体験による不登校・ひきこもり改善支援. カレントアウェアネス-E.

2023, no.461, E2616. https://current.ndl.go.jp/e2616（参照日:2025-09-06).

[15] 鳥取県立図書館ホームページ. https://www.library.pref.tottori.jp/support/index.html (参照日: 2025-07-23).

[16] 文献検索は日本語文献を対象に CiNii Research (2025 年 9 月 10 日検索) で「“ひきこもり” AND “図書館”」「“若者支援” AND “図書館”」「“若者” AND “支援” AND “図書館”」を用いて実施したが、内容的に該当するものはなかった。さらに J-STAGE (2026 年 1 月 11 日検索)、ざっさくプラス及び Magazine Plus (2026 年 1 月 12 日検索) でも検索したが、該当するものはなかった。

[17] 厚生労働省障害保健福祉部精神・障害保健課. 前掲 4), p. 21.

[18] 奈良県における地域若者サポートステーション. https://www.pref.nara.jp/44910.htm (参照日: 2026-03-04).

[19] 文献検索の結果. 前掲 16).

[20] Jung, Geun Ha and Noh, Younghee. The Role of Libraries in Supporting the Social Reintegration of Hikikomori. Korean Comparative Government Review. 29(1), 2025, p. 249-272. https://doi.org/10.18397/kcgr.2025.29.1.249 (参照日: 2026-04-23).

[21] 河本毬馨. 場としての図書館：求められる機能と役割. ミネルヴァ書房, 2026, p. 87.

[22] 柳川涼司, 腰越未樹. 図書館ボランティア体験を通した不登校・ひきこもり改善・自立支援（特集 トピックスで追う図書館とその周辺). 図書館雑誌. 第 118 巻第 1 号(通巻 1202 号), 日本図書館協会, 2024, p. 22-24.

[23] 嶋田学. 図書館・まち育て・デモクラシー:瀬戸内市民図書館で考えたこと. 青弓社, 2019, p. 261-262.

[24] 奈良県における中小企業の振興発展を支援する団体. https://www.chuokai.or.jp/index.php/organizationoverview/ (参照日: 2026-02-19).

[25] 資料は中央図書館とサポートステーションの打ち合わせ資料や、各プログラムの日程や募集に使用したチラシなど 141 枚に及ぶが、重複した資料やチラシも多く含まれている。

[26] 奈良市立図書館編. 奈良市の図書館 平成 28 年度. 2016. https://library.city.nara.nara.jp/download/toukei/平成 28 年度%20 奈良市の図書館.pdf（参照日:2026-02-09).

[27] なら若者サポートステーション. 「奈良市立図書館」との協調開催事業・打ち合わせ（資料）. 2014 年 3 月 18 日実施. 4p.

[28] 同上. p. 1.

[29] なら若者サポートステーション. 前掲 27), p. 1.

[30] なら若者サポートステーション. 「奈良市立図書館」との協調開催事業・打ち合わせ（資料）. 2015 年 3 月 13 日実施. 4p.

[31] 同上. p. 1.

[32] なら若者サポートステーション. 「平成 27 年度地域若者サポートステーション事業」企画書【継続審査用】. p. 4.

[33] なら若者サポートステーション. 「金曜の会」第一日目, 第二日目, 第三日目, 第四日目. 4p.

[34] 同上. p. 1.

[35] なら若者サポートステーション. 前掲 27), p. 4.

[36] なら若者サポートステーション. 「若葉の会」第一日目, 第二日目, 第三日目, 第四日目. 4p.

[37] なら若者サポートステーション. 「若葉の会・振り返り用紙」.

[38] 若葉の会参加者の手紙.

[39] 聞き取り調査のアポイントを取る段階で林氏に事業の概略を確認した際、林氏は参加者の状態からひきこもり支援をしているという認識が強かった。そのため、林氏が会話で用いる言葉に合わせて「若者の自立支援」ではなく「ひきこもり支援」という言葉を用いて聞き取り調査を行った。

[40] 松尾直博. 中学生の読書と自己意識の関係－読書療法の観点から－. 東京学芸大学紀要, 2011, 62, p. 205-213.

[41] 佐々木宏子. 絵本は赤ちゃんから:親子の読み合いがひらく世界. 新曜社, 2006, p. 30.

[42] 大坊郁夫. しぐさのコミュニケーション:人は親しみをどう伝えあうか. サイエンス社, 1998, p. 17.

[43] 平田オリザ. 新しい広場をつくる. 岩波書店, 2013, p. 44-46.

（令和8年3月11日受付）
（令和8年9月3日採録）

「図書館情報メディア研究　23 巻 1 号　2026 年」編集委員会委員

藤澤　　誠（委員長）

関　　洋平　　原　　淳之　　白井　哲哉

（各委員とも筑波大学図書館情報メディア系所属）

本号に関する編集規定等：

図書館情報メディア系紀要内規（2020 年 3 月 18 日）

図書館情報メディア系紀要論文投稿及び著作権の取扱いに関する要領（2019 年 6 月 19 日）

図書館情報メディア研究　23 巻 1 号　2026 年

発　行　日　　2026 年 9 月 30 日

編集・発行　　図書館情報メディア研究編集委員会

〒305-8550　　茨城県つくば市春日 1 － 2

筑波大学図書館情報メディア系

電　　話　　０２９－８５９－１０７０

ISSN　1348-7884